十一文半

おおつか みずほ

十一文半、これは私の履物のサイズである。履物のサイズを何文という表現は、足袋のサイズからきている。足袋は、大正時代に完成したとされる日本の伝統の履物であるが、なかでも最高傑作として、デザイン性・機能性にすぐれ、現在も変わらず、重宝されている地下足袋がある。国内では昔から炭坑夫や大工・左官を始めとする職人の足元に必要不可欠のものである。戦争中は、地下足袋を履いて音もなく忍びよる日本軍に悩まされた連合国軍が「チカタビ」は強力な兵器であると恐れたそうである。

では何故足袋のサイズを「文」とよぶのか、それは江戸時代の一文銭の直径を一文として足袋のサイズを文数で表したからである。これをセンチに直すときは、一文銭の直系が2・44センチ×文数になるので、十一文半は28センチになる。

統計によると、日本人の足の平均サイズは、身長÷6・7で計算されるので、逆算すると十一文半（28センチ）の場合の身長は180・9センチになる。私の身長167センチを6・7で割ると24・9センチで文数は十文になるから、私は、身体のバランスが非常に悪いのだ。

私の十一文半は、ジャイアント馬場の十六文キックにははるかに及ばないが、常人ばなれで大きく、しかも、ただ大きいだけではなく、幅も広く、甲も高く、かかとも出っ張って第三次元計測でも受けなければ実像はつかめないのだが、ただ見ただけでも不細工で格好が悪い十一文半の足は、いろいろな面で私の人生を左右した。

昭和六年、満州事変の勃発の年に生まれた私の少年期は、「欲しがりません勝つまでは」を合言葉の物資欠乏に耐えた戦乱の時代だった。当時も、布製でゴム底のズックはあったが、日常は、「足中」と呼ぶ足の半分くらいのわら草履だった。わら草履は長く持たなかった。雨に濡れたらすぐ破れた。破れたらポーンと田んぼに捨てた。予備を持たないときは裸足で帰った。物を惜しげなく捨てることを「弊（へいり）履

のごとく捨てる」というが、そんな感じだった。農家はみんな、田植え時には裸足で水田で作業し、水田の中を一カ月も素足のままだったので、キズだらけでみみず腫れになった。戦後ゴム製の田植え靴が出回ったが私の足に合うサイズはなかった。

靴屋に置いてある履物は、大体平均的なサイズがほとんどで、私の足に合う十一文半は通常の店ではなかったので、十一文を尋ね探して履いていたがギュウギュウですぐ張り破れた。地下足袋は一番上のはぜだけしか留められなかった。ゴム長靴は無理して履くと、甲が高い足から抜くのが大変であった、よそ行きの靴は靴屋に注文し、足を測ってつくったので、びっくりするような大きな靴が届いた。私はこの超十一文半の靴を大事に履いた。

私は十一文半の足のために悩まされた。大きな足は運動に向かなかった。土踏まずがないベタ足で重い足は、早く走ることには不向きだった。私はすべてのスポーツにコンプレックスをもつようになった。

大きな足はわたしにとって良いことは何にもなかった。「歩く時は安定が良かろう」とからかい気味に褒められることもあったが、たしかに接地面積は広いがそれは長所にはならなかった。

今日も一日終わった、やれやれと畳に足を投げ出したとき、上向きになった大きな両足をみて「お前たちはどうしてこんなに不細工で大きいのか」と言いたくなるのだった。

だが私の大きすぎる足も、一つだけいいことがあった。いままで大体の家庭で冠婚葬祭はほとんど自宅で行われた。

特に葬式や通夜などは、田舎の大きな家も、玄関土間の内から外まで履物でいっぱいになった。そんなときは帰りに靴が替えられたことがよくあった。

靴が替わってないか、帰るときまで気になって落ち着かないのが常であった。靴を脱ぐときは替えられない安全な場所を探すことに気をつかっていたのだ。

そんなとき私は泰然自若であった。私の超十一文半は、誰も、履き替えていく人はいないので心配することはなかった。私は堂々と玄関の真ん中に靴を脱いで上がり、帰るときも、大勢の靴の中から自分の靴は直ぐわかるので楽であった、

ある年、部落の、中学校の先生が交通事故で亡くなった。自宅の通夜に中学生もお参りしていた。人気ものの若い先生の突然の死に、通夜の席は啜り泣きが絶えなかった。読経も終わり、焼香して皆が帰りかけたとき、まだ目を腫らして玄関に出

た中学生の一団の中の、女の子の一人が、玄関土間を指さして、突然、頓狂な声を上げた。「あれ何」「あれ人間のクツ」つづけざまに言うと今度は男の子が「まさか火星人が……」直ぐ大人がドヤドヤ帰りかけて騒ぎを打ち消した。中学生の次に帰りかけていた私は注目のクツの持ち主と知られたくなかったので後戻って少し遅れて帰った。

子供たちには、私の特別大きな靴は理解できなかったのだ。私もショックであったが、それ以後は靴を脱ぐときは人目につきにくいところに置くように配慮をするようになった。

私の大きな足は、生まれつきなのか、生活環境による後天的なものなのか分からない。父も足は大きいほうだったが特に困った話はなかった。ひとりの兄は走るのが速かったので足は大きくはなかったはずだ。子供のころは十歳下の私にズックのお古が丁度よかったので、私は新しいズックを履かせてもらっていない。

私が成長するころは農村でも食料難だったのでなんでも食べたが、蛋白質は食べられなかった。

小学生も農繁期休暇をとって農作業を手伝った。成長する間もなく重いものを担いだり背負ったり重労働に従事したが、農村の若者は競って誇示するように肉体労働に明け暮れた。60キロの米俵を一気に担ぐことが一人前の証しだった。若者の身体は生活の環境に順応していったことは本人も知らない。

戦後復興から高度成長へ、世の中は大きく変わっていった。子供はドンドン大きくなった。身長は１７０センチから１８０センチが当たり前になった。私の二人の息子も大きくなった、揃って足は十一文になった。

ある日ホームセンターの靴売り場で２８０ミリのスニーカーを見つけた、売り場を巡ったら長靴も、そして地下足袋も２８０ミリのものがあった。とうとう履物の２８０ミリ十一文半が店頭に並び、世の中に公認されたのだ。私にとっては半世紀を超える長い長い時間だった。

投げ出した足に「お前たちも大手を振って歩けるようになったよ、長い間私を支えてくれて有難う」ひざを立てて両足を引き寄せた。